

安田雷洲の洋風画「群船図」（日本民藝館蔵）とその原図をめぐって

内田 洸（サントリー美術館）

安田雷洲（?～1859）は、江戸時代後期に活躍し、銅版画や肉筆の洋風画を得意とした人物である。名を尚義、俗称を貞吉・茂平といい、Willem van Leiden という蘭名を用いた。身分は幕臣であり、安政3年（1856）には小普請であったことが明らかにされている。はじめ葛飾北斎門下として錦絵や版本挿絵を手掛け、その後洋風画の道を選んだと考えられている。天保13年（1842）年『広益諸家人名録』には「蘭画」の人物として名が載っており、現在では司馬江漢（1747～1818）・亜欧堂田善（1748～1822）の跡を継ぐ洋風画家と評価されている。銅版画の代表作としては、数多くの版が残る「東海道五十三駅」（町田市立国際版画美術館蔵ほか）や、西洋絵画の風景画を想起させる連作「江戸近国風景」（神戸市立博物館蔵）、安政の大地震をモチーフにした「武江地震」（神戸市立博物館蔵）などがある。また、肉筆画に関しては、舶載洋書の挿絵に基づいた作品や洋風山水図など、銅版画の筆致を日本絵画に取り入れたユニークな画風の作品を描いた。江漢や田善が蘭学者としても活動したように、雷洲自身も蘭学者の一面をもち、銅版の日本地図や世界地図を製作し、その内の文章によれば、私塾を開いていたようである。生年は不明だが、安田家の菩提寺につたわる過去帳により安政6年に亡くなったことがわかる。

本発表では、雷洲の洋風画に関わる新資料の発見について報告し、雷洲が洋書挿絵を参考にしながらどのように作画を行ったのか、その実態を検討する。たとえば、聖書の「羊飼いの礼拝」挿絵を原図とする「赤穂義士報讐図」（本間美術館蔵）のように、雷洲は洋書挿絵に基づいた作品を複数描いており、これまでいくつかの作品の原図が明らかにされてきた。発表者が今回新たに引き上げたいのは、日本民藝館が所蔵する「群船図」（紙本著色）である。本作は無落款のため、これまで作者は限定されておらず、雷洲研究でも取り上げられることのなかった作品だが、私見によれば、銅版画のハッチングを模したような細やかな筆づかいや、絵具の濃淡やぼかしをもって山や岩の立体感を表現する技法など、雷洲の肉筆画に見られる特徴が随所にみられる。また、発表者は以前、雷洲の銅版画「魯西亜国帝都ムスクワ城之図」（神戸市立博物館蔵）の原図がオランダの画家兼探検家 Cornelis de Bruin（1652-1727）による旅行記 *Cornelis de Bruins reizen over Moskovië, door Persië en Indië*（全一卷、アムステルダム、1714年刊）中の挿絵に求められることを指摘したが、この「群船図」もやはり、同書の挿絵に基づいていることが判明した。雷洲は、本書に載る複数の洋船の挿絵を組み合わせ、再構成するかたちで「群船図」を描いている。幕末期、ロシアが日本北方へ接近を図る情勢の中で、江戸の洋風画家がいかに西洋の情報に基づいて制作活動を行ったのかについて考えてみたい。